

運の拾い方 (4)

2022. 03. 14 記す

1 もっとも確実な投資は自分への投資である

①今の仕事にやりがいを感じ、職場の居心地もよいなら、当面、社内スペシャリストを目指すのもよいでしょう。

しかし、不幸は突然やってきます。コロナ禍で職を失うこともあります。

介護のために、職を辞めざるを得ないこともあります。

今のおい上司もいずれ変わります。その後に「パワハラ上司」が来たら、目も当てられません。職場に行くのが嫌になります。

②スキルはたちまち古くなってしまいます。この50年の間に、報告書の作成も驚くほど変わりました。

手書き→和文タイプ→英文タイプ→ワープロ→パソコン→音声入力

そのたびに新しいスキルを学び、変化に対応しなければなりませんでした。

③昨日までのスキルは陳腐化します。変化のスピードは昔よりはるかに速いのです。

変化に対応して学び続けなければ、「若い老人」になってしまいます。

学び続ければ「老いた若者」であり続けることができます。分かれ目は、学び続けるかどうかです。

④技術の陳腐化の他にも、会社の倒産、事故、病気、大地震、新型感染症など、自分の力ではどうにもならない不幸が起こります。思いもしなかった災害に足を掬われます。それが人生です。

人生にはおよそ3年に1度の転機があり、10年に1度は危機が訪れます。ふだんから、今に安住することなく、激変に備えたいものです。

⑤新しいスキル獲得のために、時間と費用を投資しましょう。

今の職場以外でも通用するスキルを身につければ、鬼に金棒です。すぐに辞めなくても、

「辞めるフリーハンド」を持てば、会社に依存しない生き方ができるようになります。

「転職の選択肢」を持つことが大切です。

⑥人生でもっとも確実な投資は、自分に対する投資です。

どんなにお金を貯めても、長い人生の間には、有為転変^{ういしてんぺん}があり、お金を失うことがあります。お金は失うことがあるが、スキルは失うことのない一生の宝です。

世の中は不条理です。不条理な世間を生き抜くための最高の方法が、自分への投資です。小さなスキルを積み重ねれば、必ずその見返りがあります。

2 夢の周辺に仕事を見つける（1）

①「少年の夢」「少女の夢」と再会する

「でも何から始めたらよいか分からない」という人が多いと思います。

そんな時は、少年・少女時代の夢がヒントになります。

食事も忘れて熱中した趣味のなかに、手掛かりがあります。

得意だったこと、好きだったこと、褒められたことなど、鍵は少年/少女時代の自分自身のなかにあります。

②好きこそ物の上手なれ

わたしの身近にも「昔の少年・少女」たちがいます。

(1) 学芸会で活躍した少女は、会社勤務の後も好きなことが忘れられず、小劇団に入つて余暇を全て演劇に費やしました。10年後には劇団の中堅になりました。
まったくお金にはなりませんが、本職より演劇の方がやりがいがあるそうです。

(2) シム・シティシリーズ(都市経営シミュレーションゲーム)にはまった少年は、両親からゲームを禁止されましたが、友達の家に入り浸ってゲームを続けました。
中学・高校になって、IT関係の資格をいくつか取り、今ではコンピュータの研究者になっています。

(3) 川遊びや野原遊びが好きだった少年は、親の反対を押しきって農業高校に進みましたが挫折しました。その後庭師に弟子入りして10年間学び、今では園芸デザイナーとして活躍しています。

③ラジコン作り、昆虫採集、天体観測、釣りなど、だれしも小さい頃に熱中したことがあるはずです。好きなことの周辺で花を咲かせることができたら、これほど幸せなことはありません。金を稼ぐために仕事を見つけるのではなく、好きなことの周辺に仕事を得る。そのためスキルを身に付ける。自分の再発見です。

④好きな仕事を見つけるのは、若い人の特権ではありません。50代になって道を開いた女流画家から、直接話を伺ったことがあります。

小さいときは虚弱体質で、一人で絵を描いている内向的な子供だったそうです。

結婚し子供にも恵まれても、子育てだけで終わるのには納得できませんでした。

お茶、華道、料理と手を出しましたが、心が燃えなかつたそうです。

さまざまなことに挑戦して失敗し、いつも不全感に悩まされていました。

⑤ある日、小学校時代に先生から絵を褒められたことを思い出し、油絵教室に通い始めました。しかし、インストラクターのいうように描くのは苦手でした。

「自分の絵はいつも画面からはみ出している」と感じていたそうです。

⑥やりがいを求めて葛藤する日が10年近く続きました。たまたま友だちと桂林（中国）を旅行したとき、墨絵を見て感銘を受けました。

油絵はあきらめて自己流で日本画を描き始めた。それは彼女の感性にぴったり合いました。これこそ究極の自己表現だと思い当たりました。

長い彷徨^{ほうこう}を続けた後、やっと彼女は光明を見出しました。生きる意味を与えてくれる確かな道を見つけたのです。

⑦それ以来、彼女は桜、ボタン、椿などの花の絵を描き続け、50代になってはじめてプロの画家になりました。彼女にとって仕事は単なる生計の手段にとどまらず、生きがいでもあるのです。羨ましい限りです。

わたしも彼女の桜の墨彩画を見て感ずるものがあり、譲り受けて部屋に飾っています。

3 夢の周辺に仕事を見つける（2）

①かつて詩人になることを夢見た少年がいました。

日本の近代詩が好きで、三好達治、室生犀星、北原白秋など好んで暗唱していました。

三好達治の「^{いし}藝のうへ」が特にお気に入りでした。

あはれ花びらながれ
をみなごに花びらながれ
をみなごしめやかに語らひあゆみ
うららかの^{あしおと}聲^{ひとも}空にながれ
をりふしに^{ひとみ}瞳^{ひとみ}をあげて

かげ
翳りなきみ寺の春をすぎゆくなり

②しかし、詩人では食べていけません。やむなくサラリーマンになりました。

会社に入って3年たった頃、「文学好きなら社内新聞に何か書いてみて」と、総務から声がかかり、仕事がらみの短文を載せました。それが好評で、月1回1年間連載することになりました。それ以来、社内の研究誌や社内誌からよく声がかかるようになりました。

③その後ほどなく、彼は転職したので、会社とは縁が切れてしまいました。

転職後の仕事はカネ、カネ、カネ、カネと金が全てで、アートの香りもない仕事でした。喜びがないというより、嫌気がさしました。

④「マネジメントの父」ピーター・ドラッカーは、「正気取り戻し、社会への視野を正すために、日本画を見る」といいます。彼が禅画、花鳥画、動物画を好んだのは偶然ではありません。

お金は大切です。その力はリアルです。しかし、生きるためにお金が必要なのであって、お金のために生きるのではないです。ビジネスに染まると人間性を見失います。

⑤転職後10数年もたって、以前の会社の縁で、出版社から企画が持ち込まれました。

「興味のあるテーマを書いてみないか」という鷹揚な申し出でした。全く予想も出来ない話でした。それ以来、彼は仕事の傍ら「いかにビジネスを生きるか」をテーマに考え、書き続けました。

⑥壮年期の最も忙しい時も、書くために膨大な文献を調べ、幅広い読書を積み重ねました。

考えるのは、楽しい充足感のある作業でした。こうして、書くという作業によって、彼はからうじて精神の均衡を保ちました。

⑦少年は、40代になってやっと自分のテーマを見つけたのです。自分を再発見したのです。考えることは実に面白い作業です。くめども尽きない作業です。その向こうには、人類の壮大な知的遺産が広がっているのですから。

⑧二足の草鞋は大変でしたが、それは本業をはるかに超える達成感をもたらました。また、新たな収入源となりました。こうして詩人になりたかった少年は、夢の周辺に新しい「生きがい」を見つけました。

以上が、かつて詩人を夢見たわたしの半生です。

4 学びなおす（リカレント）という方法

①一步踏み出す勇気

仕事が行き詰まり切羽詰まっている場合は、新しいスキルを身につけるため、すぐに一步踏み出さなければなりません。グチをいっている暇はありません。まずは行動することがポイントです。

情熱という風でヨットの帆を膨らませることです。動かないヨットは操縦もできません。

②こういうと、時間がない、仕事が忙しい、お金がない、などと、なぜできないかをとうとうと述べる人がいます。これは運が悪い人の特徴です。

こういう人たちは実はやる気がないのです。本当の問題は彼ら自身にあります。

③一步踏み出せば、スキルを身につけるだけでなく、同じような仲間と知り合い新しい世界が開けるでしょう。それは、何もしないより、はるかによい結果をもたらすはずです。行動なくしては、何も生まれません。わたしなら一步踏み出します。その方がワクワクするからです。

生きるとは呼吸することではなく、行動することである（ジャン=ジャック・ルソー）。

④出来ることから始める

そうはいっても、現実を無視して行動を始めても、挫折してはあぶはち取らずです。そのためには「今の状況で出来るスキルには何があるか」をじっくりと検討することが重要です。そして「出来ることから始める」のがコツです。

⑤例えば英会話の上級ではなく、中級を狙います。それも無理なら初級でもいいでしょう。上級なら1000時間以上、中級なら数百時間、初級なら数十時間と、かかる時間に大

きな違いがあります。

パソコンや簿記なども、目標とするスキルの程度に応じて、費やす時間も費用も変わります。

⑥「遠くの大きな目標」を立てた人は、たいてい失敗します。大きな夢に囚われてはなりません。まずは「近くの小さな目標」を達成することが大切です。われわれは現実的でなければなりません。投下できる時間と費用に応じて、コツコツと刻むのが秘訣です。ガムシャラにやっている人ほど、挫折します。無理をしては何事も長続きしません。

⑦リカレント教育とは？

最近はリカレント (recurrent) 教育が話題になっています。

社会人になった後も、夜学や専門学校や大学/大学院に入ったり、資格取得の講座を受けたりして、学び直すことをいいます。

時代の変化とともに、次々と新しいスキルが必要となります。社会人になった後も学び続けなければ、時代に取り残されます。今の仕事が将来も続く保証は全くありません。。

⑧学校で学んだ知識や技術は、すぐに陳腐化します。最近では新車のネット販売さえ行われています。銀行の窓口業務も近い将来 AI にとって変わられるでしょう。

難しい時代ですが、将来を見て自分へ投資すれば、チャンスが開けます。

「リカレント教育」「リスキル」「手に職をつける仕事」などをネットで検索すれば、翻訳、秘書、^{さむらいぎょう}士業アシスタント、WEBデザイナー、スマホアプリ開発など、さまざまなもののが見つかります。

⑨今ではウェブセミナー、オンライン研修なども多彩ですし、無料、低価格のものから高額なものまで揃っています。ラジオの英会話、BBC、CNN さえ無料で聞けます。何を学ぶかは、好き嫌いや、感覚的に決めるのではなく、よく調べて「少なくともこれから十年は売れるスキル」を選ぶのが肝心です。

5 「日々の努力」がスキルを身につけるコツ

① 日課という方法

目標達成のための極め付きの方法は、「日課」です。「日課という方法」に気がつけば、

目標は半ば達成したようなものです。日々の歩みは遅々としていても、思いがけなく大きな成果を上げることができます。

「小さくはじめて長く続ける」ことがコツです。1日1日をコツコツと刻む人こそ、最も遠くに行く人です。

②漆工芸家・松田権六の「一日一図案」

日課という最も実践的な方法を知ったのは、漆工芸家（蒔絵師）の松田権六（1896—1986）の『うるしの話』からです。

20代の若さで工芸界に衝撃的なデビューを果たし、大胆な構成と鮮烈な意匠で近代漆芸の金字塔を打ち立てた人物です。

③彼の仕事の秘密は、次の言葉に尽くされています。

非凡とは平凡の積み重ねである。

わたしは天才ではないから続けることによって成果を上げる。

一日二つの図案を描いても、次の日に休んでしまったらダメだ。

④ある日弟子が一日に百図案を描いて松田に見せたら、「数の問題ではない。こつこつ努力した一案が大切なのだ」とひどく叱られたといいます。

調子のよい日も悪い日も毎日一図案を描いて、何もしない日を作らない。そのような地道な努力が大切だということです。

⑤彼はまず身近なところから日課を始めました。

庭の植物を観察し、それからヒントを得て新しいデザインを考えました。それは大変な作業だったはずです。彼はそれを「図案日誌」に書き留めました。「一日一図案」の日課の始まりです。

「1カ月30、1年365と積み重ね、1000図案になれば必ずよいものがある」と彼は常々語っていたということです。

⑥達成感という報酬

日課にとりかかる時は、ちょっとした決心が必要ですが、3週間もすれば慣れてしまします。日々の歩みは遅々として、ちっとも進んでいるように見えませんが、3カ月、半

年、1年と続けるうちに、成果は確実に上がります。

やがて、日課から小さな達成感・充足感を感じることができます。

努力なしに得られた成果には喜びは感じません。努力するからこそ達成感をえられるのです。運を拾うためには、日々の努力が必要です。継続こそ命です。